

対岸の華事 中国WATCHING

VOL.9 2012.9.13

北京っ子が外から祖国を見る



moriryです



今月のトピックス

「パンダ」

熊猫

パンダ（ジャイアントパンダ）、中国名は「大熊猫」（ダシュンモオ）と称する。地球上で最も愛らしい、そして希少動物の一 종류で、白と黒にはっきりと分かれた体毛が際立った特徴で、寝ている時以外はほとんど緩慢な動作で笹を食べて遊んでいます。その一つ一つの動きがなんとも言えず可愛らしく、地球上の人々を魅了しています。私は皆さんと同じようにパンダが大好きです。しかし、ついこの前の7月に上野動物園で生まれたばかりのパンダの赤ちゃんが肺炎で亡くなりました。とても残念に思います。

さて、パンダは一万年前からいたといわれていますが、実際記録にあったのは今から二千年を遡った中国の周秦時代でした。その後の1869年、フランス人の宣教師が四川省の宝興県で地元の猟師が持っていた白黒模様の毛皮を見たきっかけにパンダを探し出し、その過程の詳細な記録とパンダの標本を公表したことによって、初めてジャイアントパンダの存在が世界中に知られるようになりました。パンダは中国大陸で生息し、二十世紀には絶滅の危機にも瀕しましたが、中国政府が懸命に保護プロジェクトを実施したことによって、現在、四川省・陝西省・甘肅省など竹林の密生する高山地で、人工飼育と野生自然繁殖により数が増えつつあります。

パンダは中国語で「熊猫」と書きますが、なぜ熊と猫の漢字を使って名前にしたのか知っている方はいらっしゃいますか？実はパンダは哺乳類ネコ目（食肉目）クマ科ジャイアントパンダ属に分類される食肉類の動物なのです。これを知ると、あの笹と竹だけを食べるパンダが肉食動物に分類されていることがちょっと信じ難いかもしれません。

続きまして、可愛いパンダの身長と体重についてどこまで知っていますか？多くのパンダは生まれた時の体重はわずか100g前後で、小さめのトマトの重さに相当します。しかし、その1か月後に2kg、3か月後に6kg、そして成年になればなんと200kg前後の巨漢になります。身長も最初は人間の手の平にもないくらいの大きさから大体1.5mくらいまで背が伸びます。これを知ると、パンダは笹と竹だけを食べてこんなに大きくなるのはとても不思議に思うでしょう。



パンダは栄養価の低い竹を主食としています。しかし彼らはもともと肉食獣のため、草食獣のように長い腸によって栄養分を充分吸収できません。そのため大人のパンダは1日10~15kgの竹を食べなければなりません。調査によりますと、100gの竹からわずか17gしか栄養分を摂取できないとのこと。対照的に、シカなどの草食動物は、100gの草から80gを栄養分として吸収するそうです。大人のパンダが1日に食べる15kgの竹から、摂取可能な熱量を計算すると、わずか4,500kcalにしかなりません。そして消費カロリーは1日約4,000kcal強になるとのことです。摂取した熱量のほとんどを消費しており、蓄えに回すことができません。そのため無駄なエネルギーを使うわけにはいけないので、起きているときはひたすら竹をむさぼり食い、その他の時間の大半は寝ることによってエネルギーの節約に努めているのです。実は野生のパンダは竹のほか、たけのこ、昆虫類、鳥、小さな小型の哺乳類を食べています。他の動物の死体も食べます。人工飼育のパンダには笹と竹の他に、とうもろこし、さつまいも、ミルク粥、そして果物と野菜のリンゴやにんじん、サトウキビ、なつめ、柿なども与えて栄養調整しています。パンダはその昔肉食動物でしたが、餌が不足し、年中生えている竹を主食にしたといわれています。やむなく肉を食べるのを諦めなく

ては生き残れなかった肉食動物といったところでしょうか。

さて、パンダはクマ科で熊の特徴を多く持っているから漢字で書くと「熊」が先、「猫」が後になると思う方がいるかもしれませんが。実はもう一つの理由があるのはご存知ですか？パンダは熊より温厚な性格の猫によく似ていると中国では言われていたため、「猫熊」と呼んでいました。それを文字に書くときは、古くから伝わってきた風習によって右から左への書き順で「熊貓」と書いていました。しかし、いろいろな海外の展示場でパンダは右から左へ読む「熊貓」と案内されていましたが、外国人は左から右に読んでいました。これが発端となり、いつの間にか中国国内でもパンダは「熊貓」と書くようになりました。また、1949年に中華人民共和国が建国されてから様々な維新改革が行われ、文字の書き順も世界文化に従い、左から右へと改められ、「熊貓」が正式な表記として広がりました。しかし、その影響を受けていない台湾では、今もパンダを「猫熊」と呼んでいます。

この誰にも愛されている動物が近代歴史上で繁殖できず絶滅の危機に遭い、地球上から消えそうになっていたのです。それにはさまざまな原因がありますが、パンダの繁殖力が衰えていることが最も重要な原因であると専門家が指摘しています。



野生のパンダは生まれてから一、二年間ほど母親と行動をともにします。その間、母親のパンダは発情を抑え、子供に木登りや食べ物さがしなどを教え、いわゆる子育てに専念します。その後、親離れした子供パンダが単独生活に入り、発情期以外はほとんど他のパンダとの交流ができない森の深いところで‘一人暮らし’をします。そんな環境の中で孤独になったパンダは生きるためのテクニックや子孫繁栄するための本能などはすべて自分で探って成長していかなければならないのです。パンダの発情期は年に一度しかなく、しかも発情期中に気に入った相手がいなければ交尾のチャンス逃してしまいます。また、気に入った相手を見つけたとしても、うまく交尾をして妊娠に至る雌パンダがごくわずかしきません。その中で、ようやく赤ちゃんを産んだ母親パンダは経験不足と自分自身が生きることには精いっぱいのため、本能である

子育てができなくなったり、疲労で子育てを放棄してしまうことが多く、せっかく生まれた赤ちゃんがそれらの原因によってすぐ死んでしまうケースが少なくありません。これまでの統計データによりますと、雄雌パンダ共に不妊率はなんと80%以上で、生存能力も低下しつつあります。このような事情で長い年月を経て、パンダの生殖能力が弱くなり、子孫の数が年々減っていく傾向となりました。1960年代には、中国で推測されたパンダの頭数は約100頭以下しかいない状況になってしまいました。

何としてもパンダを救おうと中国政府が巨大プロジェクトを計画し、1960年代後半に「四川臥龍保護区」を始め、四川省内に40か所のパンダ保護施設を建設しました。また、パンダの密猟を厳しく取り締まるために、「森林法」、「環境保護法」及び「野生動物保護法」などの法律に「パンダは国家一級保護動物である」という内容を加え、パンダを密猟した者、パンダの毛皮を売買した者、或いはパンダを食料にする者に対しては、死刑から禁固20年までの厳しい処罰措置を取りました。

以上の法律に守られていたパンダの保護プロジェクトは、中国で順調に実施され、国内各界の支援と協力を得るだけではなく、世界中の専門家や慈善家からの様々な支援もたくさん受けました。また、中国政府は生態環境を整えることや緑化率を拡大することにも大いに力を入れました。このお陰で、一時は絶滅の危機に遭っていたパンダが人間の力に守られ、先進技術の人工飼育によって数はどんどん増えてきました。現在、中国の保護施設で育ったパンダと野生で自然繁殖したパンダの数は約2,000頭に増えました。パンダの人工飼育が成功したことは人類の発展に関わる古生物学、形態学などの分野にも大きく貢献しました。

すくすくと育ったパンダはその愛らしい姿で世界中の人々の心を癒しながら多くの国際舞台でも活躍しています。特に国家間の親善大使を務めたり、多くの善意イベントのイメージキャラクターに選ばれたり、また、2008年北京オリンピック大会のマスコットのような大役も果たしました。さらに、友好交流のために、中国からパンダ



の「お嫁さん」や「お婿さん」、或いは「養子」をたくさんの国に送り出し、人間の大切な友として、歴史を動かすほどの役割を果たしています。現在、パンダは日本とアメリカに12頭ずつ、メキシコとタイに3頭ずつ、フランス、スコットランド、オーストラリアなどの国にも2頭ずついます。つい前日の9月6日には、シンガポールに「武傑」（ウジェ）と「滬宝」（フォボ）の‘ご夫婦’が新居を移したばかりです。パンダたちはどこの国に行っても、その国の人々に愛されてとっても大切にされています。



日本にパンダが初めてやってきたのは1972年の「康康」（カンカン）と「蘭蘭」（ランラン）でした。この2頭が日本に来た当時、日中国交正常化とあいまって日中国民の友好感情にプラスになったうえ、日本国中でパンダブームを起し、経済効果や人々の心の癒し主となりました。パンダに会うために毎日上野動物園に通う人もたくさんいたそうです。その後、「康康」（カンカン）と「蘭蘭」（ランラン）は居心地よい上野動物園で死ぬまでのんびりと暮らしていました。そのほかにも、日本で生まれたパンダの子孫を含めて約40頭余り、みんなに愛されながら幸せに暮らしています。もちろん、日本で亡くなったパンダもいましたが、このパンダたちは日中友好のために黙々と使命を果たしたといえます。今年7月に上野動物園で生まれたばかりの赤ちゃんパンダが亡くなりましたが、その代わり8月に、和歌山県白浜の動物園にいる「良浜」（リャンビン）と「永明」（ヨンミン）の間に待望の双子の赤ちゃんが生まれた朗報がありました。そのうちの1頭の赤ちゃんが残念ながら亡くなったのですが、もう1頭は現在もすくすくと育っています。このような明るいニュースを聞きますと、本当にうれしく思います。

中国生まれのパンダが世界各国でこれからも子孫を残し、親善大使として活躍しています。その国の人々に愛され、友好関係が広がることを心から願っています。